

Oliver Twist における 天に召される子供のイメージ

吉 田 一 穂

1. ディケンズと子供時代

ヴィクトリア朝時代の多くの文学、絵画、写真は、この時代の人々の子供時代への関心を示しているが、チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812-70）の作品も例外ではないようだ。これには、彼自身の自伝的部分が深く関係している。ディケンズの父親（John Dickens）は、生来陽気な人で仕事熱心であったが、経済観念に乏しい人であった。彼は、とうとう借金が払えなくなって、マーシャルシー（Marshalsea）監獄に投獄されてしまった。これはチャールズが12歳のことで、彼は、ストランド（Strand）のハンガーフォード・ステアーズ（Hungerford Stairs）にあったウォレン（Warren）靴墨工場へ働きに出なければならなくなった。このことは、鋭敏で学問で身を立てようとしていた少年に、筆舌に尽くし難い苦悩と絶望感を与えたのであった。この時受けたディケンズのトラウマ（傷痕）¹は、生涯彼の心につきまとうことになった。²なかでも母親が、ディケンズを靴墨工場から解放することに反対し、週7シリングの安賃金をかせぐため、靴墨工場にとどめておこうとしたことは、ディケンズにとって忘れることのできない辛い思い出となった。このような自伝的部分からディケンズが子供時代の大切さを身にしみて感じていて、産業社会や親の犠牲になった子供達への共感から、それを自身の作品に表現したと考えられる。³つまり、ディケンズは、ウォレン靴墨工場での経験により、最も貴重な原初的な子供の体験が大人により危険にさらされる可能性のあることを、*Oliver Twist*（1838）において示そうとした

と考えられる。

いみじくも、ポール・シュリック（Paul Schlicke）は、ディケンズが悪党の名前フェイギン（Fagin）をディケンズ少年時代の仕事仲間、つまり実在した人物ボブ・フェイギン（Bob Fagin）からとったこと、⁴そして、フェイギンの秘密の隠れ家として、ディケンズ自身が働いた靴墨工場を髣髴させる場所を、*Oliver Twist* の作品舞台に設定していること、を指摘している。さらにシュリックは続けて、*Oliver Twist* においてディケンズがとった手法について、「子供を中心人物とし、同時代のコンテクストにおいて、ワーズワース（Wordsworth）の幼年時代についてのアイディアを自身の作品においても発展させた形で実現することであった。」と説明している。⁵ ワーズワースの言う「子供は大人の父である」とは、人間にとって最も根源的な価値経験は、幼少の時期に清純で無垢な童心によって体験されるのであり、したがって、大人は最も貴重な原初的な体験者の子供を父として「敬愛」（piety）を捧げていかなければならない、という意味である。⁶ すなわち、この言葉は、子供は清純で無垢な童心を持っていて、俗世間にまみれていないがゆえに良き感性を持っていて、大人より神に近いという意味合いを含んでいるのである。

子供が大人より神に近いという観点から考えるとディケンズは、子供の清純で無垢な童心を描くとともに、彼の生きる時代において子供の死亡率が高かったという事実を認識し、それを「天に召される子供のイメージ」として作品において表現したと考えられる。ディケンズは、ヴィクトリア朝時代における自身の子供時代に関する考え方を読者に解りやすい形で表現した。彼の考えの片鱗は、*The Old Curiosity Shop*（1840-41）のネル（Nell）の死を待つまでもなく、⁷すでに *Oliver Twist* に見られるようだ。ディケンズは、1837年、25歳の時、月刊雑誌 *Bentley's Miscellany* の初代編集長となり、一月に第一号を発行した後、第二号（二月号）から長編小説 *Oliver Twist* を連載した。この作品で、オリヴァーは最後に慈悲深いブラウンロウ（Brownlow）氏に養子として引き取られたおかげで、かろうじて悲劇的運命

をまぬがれている。このようなオリヴァーの運命は、もし彼が、孤児のままで、虐待を受け続け、後に犯罪者の一味に取り込まれていたままであれば、ネルの死と同様の死となっていたと十分考えられる。

そこで、本論文では、*Olive Twist* においてディケンズの考えるヴィクトリア朝時代の子供時代がどのように表現されているかを考察してみることにしたい—果たして彼は「天に召される子供のイメージ」を用いているのだろうか。

2. 煙突掃除人 (chimney sweeper)

(a) *Oliver Twist* における描写

Oliver Twist の中では、1834年の救貧法改正決議がディケンズの念頭にあったことを窺がわせる描写がある。本質的にそれは福祉改革の衣をまといながら、働くことのできるだけの体力を備えた貧困者が公的援助に頼ることをやめさせるために援助の額を縮小するという内容だった。救貧院の食事が乏しければ、貧困者は飢えと不快のためにいやおうなく仕事探しに出るものと考えられていたのである。⁸ *Oliver Twist* において最も有名なシーンは、「お願いします。もっとほしいんです。」⁹ とオリヴァーが頼むシーンである。このシーンからも、ディケンズが救貧院の窮状を描き出す意図を持っていたことは明らかであろう。オリヴァーは、成長期の食べ盛りの少年として食事をより欲しがることから、拘禁処分に付され、年季奉公に出されそうになるのである。

もっと食べ物が欲しいと頼んだオリヴァーは、救貧院の役人によって犯罪者のように扱われる。たったひとりの部屋に閉じ込められ、人前に出る時は、他の子供達への見せしめとしてむち打たれる。その後、彼は煙突掃除に奉公に出されそうになるが、かろうじてまぬがれる。

ディケンズは、*Oliver Twist* の中で、煙突掃除人ギャムフィールド (Gamfield) の言葉により、年季小僧として扱われていた子供達がひどい扱いを受けていたことを次のように表現している。

‘It’s a nasty trade,’ said Mr. Limbkins, when Gamfield had again stated his wish.

‘Young boys have been smothered in chimneys before now,’ said another gentleman.

‘That’s acause they damped the straw afore they lit it in the chimbley to make ‘em come down agin,’ said Gamfield; ‘that’s all smoke, and no blaze; vereas smoke ain’t o’ no use at all in making a boy come down, for it only sinds him to sleep, and that’s wot he likes. Boys is wery obstinit, and wery lazy, gen’lmen, and there’s nothink like a good hot blaze to make ‘em come down with a run. It’s humane too, gen’lmen, acause, even if they’ve stuck in the chimbley, roasting their feet makes ‘em struggle to hextricate themselves.’ (16)

「きたない商売だな」と、ギャンフィールドが再び彼の願いを述べた時、リムキンズ氏が言った。

「年のいかない子供が、今までに、煙突の中で相当窒息しているね」とほかの紳士が言った。「そりゃ、奴らがおりてこないもんで、藁を濡らしてから、煙突の中で火をつけたからでさあ」とギャンフィールドが言った。「まったく、煙ばかりで、全然燃えてやしません。ところが、子供をおりて来させるにゃ、煙じゃ、てんでだめでさあ。だいたい、眠っちゃうからね。眠るのが、好きなんですよ、子供は。子供ってもんは、なかなか強情っぱりで、怠けものなんですよ、旦那。だから、熱い炎でなくっちゃ、いそいでおりて来やしませんよ。たとい、煙突にかじりついたって、足を焼かれりゃ、一所懸命逃げだして来ますからね、それが情でもあるんでさ」

救貧院の門の外側には貼札が貼り出され、そこには、オリヴァー・トゥイストを救貧院からひきとる者には、誰にでも 5 ポンドの札金を提供すると書

いてあったが、リムキンズ (Limbkings) は、煙突掃除がきかない仕事なので礼金をまけるように言う。結局、3 ポンド10シリングに落ち着くことになる。バンブル (Bumble) 氏は、「教区には、3 ポンド10シリングの出費だがね、お前には親がないから、親代わりになって下さる親切なありがたい方々が、お前を年季小僧に出して、お前が世間で身を立てて、一人前の男になれるようにして下さるのだ。」(18) と言い放つ。

オリヴァーのような貧民の場合、9歳を過ぎると、それ以降21歳になるまでは、民生委員によって本人の承諾なしに年季奉公に出されることがあった。子供の承諾を得る必要がないので、教会区にとって、彼を粗暴な煙突掃除夫ギャンフィールドのような悪党の手にこっそり売り渡すことは、いっそう簡単なことであった。また、師匠がその子の教会区と異なる教会区に住んでいる場合、その子を受け持つ教会区当局が、その子を師匠に世話する動機には、財政的な事情が絡んでいたようだ。なぜなら、その子が他の教会区で40日以上過ごせば、彼を年季奉公に送り出した教会区からは、経済的責任がなくなったからである。¹⁰

バンブル氏の「誰にも可愛がられないみなし児のためだ」(18) という言葉にアイロニーが感じられるのは、煙突掃除が、子供達にとってみれば全くありがたくない仕事であり、危険極まりない仕事であったからである。ここで19世紀に非人間的扱いを受けた労働者階級の子供達について触れておきたい。

(b) 19世紀イギリスの労働者階級の子供達

19世紀に何よりも暗い陰を落としていたのは、イギリス労働者階級の特に女性と子供の労働者に対する過酷で非人間的な扱いである。かれらは生活が支援されるべきものだったにもかかわらず、貧民階級への資金援助は国庫の無駄遣いとみなされていた。

多くの工場は労働者で過密状態にあった。加えて、長時間労働に劣悪な食べ物と病気、過労が重なって、イングランドの労働者の間に熱病が大流行し

た。1801年のことである。そのため、1802年に労働時間に関する法律ができた。¹¹ この法律では、子供の場合は、一日の労働時間が12時間に制限され、1時間半の食事・休憩時間が設けられた。一日12時間労働とは、普通の大人にしても多い労働であるにもかかわらず、それを国が認めていた。それでも、この法律ができるまでは、子供達はもっと過酷な労働をさせられていたのだった。1802年の法律が出されてから、子供の労働時間を制限する法律は次々と出された。1833年の工場法の規定では、9歳未満児童労働の禁止、13歳未満児童労働時間の一日あたり9時間・週あたり48時間への制限、18歳未満少年労働時間の一日あたり12時間・週あたり69時間への制限、午後8時半から午前5時半までの夜業禁止、4名の工場監督官の設置、などが定められた。¹²

しかしながら、法律ができて煙突掃除夫は子供を煙突の中に入れて掃除させていた。煙突掃除は、救貧院の役人の一人もそう認めているように、「ひどい仕事」で小さな男の子達が煙突の中で窒息して死んでしまうこともしばしばあるほどの危険なものであったことが指摘されている。¹³ 煙突掃除夫にこきつかわれた子供達は、19世紀イギリスの労働者階級の子供達、それも最下層の子供達であった。「登りっ子」と呼ばれていた煙突掃除の少年が仕事を始めるのは、普通は5歳からだった。また極貧家庭の子供は煙突掃除の親方に売られることもあった。親方にはその子供の面倒をみる義務はいいさなかった。

このころの労働者階級の子供達には、「人権」というものが全く無かったと言っても過言ではない。1834年には、少年が徒弟として煙突掃除をしなければならぬ時には、治安判事2名の面接を受けて、「自分からすすんで煙突掃除の仕事をしたいと思っている」ことを宣言しないとイケないという児童労働に関する法律が可決された。これは、ただの見せかけのものであり、少年達にとっての労働は、今までより良くなるということではなかった。

ディケンズは、*Oliver Twist* において、オリヴァーと治安判事との面接を描き出している。「その子供は、煙突掃除が好きなんだろうね」(19)という質問に対し、バンプル氏がオリヴァーの代わりに、「まったく夢中でござ

います。」(19)と答え、「どうしても煙突掃除人になりたいというのかね」(20)という質問に対し、「もし、我々が明日にでもこの子供に他の商売をおしつけようしますならば、たちまち逃げ出すにちがいありません」(20)と答える。ここでオリヴァーがかろうじて危機を脱することができたのは、ひざまずき、両手をかたく組み合わせ、自分をあのおそろしい男のところへやってしまうくらいならば、¹⁴ もう一度救貧院の暗い部屋に返してもらったほうがよい、ひもじくてぶたれても、たとえ殺されても、そうして欲しいと嘆願することによってであった。

(c) ウィリアム・ブレイクの “The Chimney Sweeper”

ひどい扱いを受けた労働者階級の子供達の代表とも言えるべき煙突掃除の子供達については、ウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757-1827) がすでに “The Chimney Sweeper” において描写している。次の引用は、詩の中の一部である。

When my mother died I was very young,
And my father sold me while yet my tongue
Could scarcely cry 'weep 'weep, 'weep 'weep!¹⁵

母さんが亡くなった時、ぼくは本当に幼かったよ。

父さんは、ぼくがまだ幼な過ぎて舌もまわらず、シュー、シュー、シュー、シューとも言えないうちに、ぼくを売りとばしてしまったよ。

この詩は子供がまだそうじ (sweep) という言葉もしっかりと発音できない年端もいかない頃に売られたことを伝えている。事実、煙突掃除の子供は小さければ小さいほど良かったのである。*Oliver Twist* で強盗の際、小さな格子窓に入れる小さな子供を欲しがるサイクス (Sikes) は、「煙突掃除人のネッド (Ned) という餓鬼が手に入ったらなあ」(139) と言うが、サイクス

の言葉が、煙突掃除の子供の体が小さいほうが都合がいいことを言い表している。煙突掃除の子供は、7年間見習い期間があったが、その後は、たいいていの場合、体が大きくなりすぎて、小さな煙突を登ることができなかった。¹⁶

体の大きさが小さいほど煙突掃除に向いていたことは確かではあるが、この仕事は、決して小さい子供が簡単にこなせるものではなかった。小さな子供達にとって煙突はとても狭く、ひざとひじを使って少しずつ登らなくてはならなかった。ひざとひじは、最初はひび割れし、出血したが、6ヶ月ぐらいすると炎症をおこし、足の裏ははれ上がったのである。¹⁷ それだけでなく、ひざ皿がねじまがり、背骨や足首が変形し、呼吸器官の疾患にかかり、目の炎症を起こす子供も少なくなかった。¹⁸ さらに、すすが原因で皮膚癌になる子供もいた。師匠の中には、煙突掃除以外に、盗みを奨励したり、他の雇用の機会を得させるために、通りで泣き叫ばせたり、物乞いをさせたりする師匠もいた。煙突掃除の子供達が卑しくて盗みをするという評判は、彼らを社会の浮浪者へと駆り立てた。¹⁹ このような状況では、地上に生きているより、死後に幸せを望む子供像が生まれても不思議はないのである。

ブレイクは、“The Chimney Sweeper”で煙突内で死ぬ子供を「何千人ってすすはらいがディック (Dick)、ジョウ (Joe)、ネッド (Ned) も、²⁰ ジャック (Jack) も、みんなが全部黒のお棺に閉じ込められた」²¹ と描写している。注目すべき点は、ブレイクが「ピカピカの鍵を持った天使が通りかかり、棺から子供達を解放した」²² と表現し、読者に「天に召される子供のイメージ」を印象づけている点である。ブレイクは、彼の死んだ子供達への共感から安らかな死と関連づけるため、「天に召される子供のイメージ」で表現したと考えられる。そして、ディケンズもまた、ブレイクと同じようなイメージを用いているのではないだろうか。それを以下、検証してみたい。

3. オリヴァーの運命と天に召される子供のイメージ

老治安判事が、オリヴァーの恐怖を見てとり、年季奉公の承認を拒絶してくれたおかげで、恐ろしい運命から逃れたものの、オリヴァーは、最終的に

サワベリー (Sowerberry) 夫婦の葬儀屋に徒弟奉公に出されることになる。オリヴァーが奉公に出て一ヶ月後のことであるが、このころはしかが流行し、多くの幼児が亡くなる。そして多くの葬式の行列の先頭に帽子のリボンを膝まで垂らしたオリヴァーが立ち、町の母親達の賛美と感動的となる。

この葬儀屋という商売で注目に値することは、次の二点である。すなわち第一点は、作品においてこの商売が、幼児の死と結びつけられている点である。第二点は、救貧院で飢え、煙突掃除の子供となる危機からかろうじて逃れたオリヴァーの運命、すなわち、時代の中で犠牲となり、死の危機に直面していた子供の象徴とも言えるオリヴァーの運命と葬儀屋とが結びつけられている点である。もし、ブラウンロウ氏による救いが後になれば、オリヴァーがディック (Dick) によって暗示される運命をたどるであろうことは、想像に難くない。

サワベリー夫人、ノア・クレイポール (Noah Claypole)、シャーロット (Charlotte) からひどいしうちを受けたオリヴァーは、葬儀屋から逃げ出す際、里子に出されたディックと会う。「また会えるよ、ディック。きっと会えるよ。君は元気になってしあわせになるよ。」(49) とオリヴァーはディックに別れの言葉を告げる。それに対し、医者にかかっていると言われたディックは、死んだ後に会えると答える。さらに「天国や、天使や、目が覚めている時には見たこともない親切な人の顔の夢をたくさんみるよ」(49) とつけ加える。ディッケンズは、ディックの言葉により、天に召される子供のイメージを読者に印象づけるだけでなく、時代の犠牲者である子供の死が安らかであって欲しいという自身の願望をも表現しようとしたのだろう。このことは、後にディックがバンプル氏に向かって語る言葉からも証明ができる。ディックは、バンプル氏に自身が小さい時に死んで嬉しいとオリヴァーに伝えたいと言う。ディックはその理由を、自分が大人になるまで生きていて、年をとってしまったら、天国にいる妹が自分のことを忘れてしまうか、自分と似ていなくなってしまうからだと言う。「僕たちが2人とも子供でいっしょにいられたら、その方がずっと幸福だよ」(122) というディックの言葉か

らわかるように、ディケンズが、地上において生きているより天に召されて幸福であるという子供像を提示した、と考えられるだろう。

オリヴァーは、サワベリー夫人、ノア・クレイポール、シャーロットのひどいしうちにがまんできなくなり、家のない脱走者となってロンドンに向かう。そして彼は、アートフル・ドジャー (Artful Dodger) にそそのかされて、ロンドンの悪名高い一画、サフロン・ヒル (Saffron Hill) に入りこんでしまう。犯罪者の一味に引き取られたオリヴァーは、自身もまた犯罪を犯す危険に直面する。悪党団の親方であるフェイギンは、仲間でプロの強盗であるサイクスに「わしはじっとあの子を監視していた。いったん自分が我々の仲間だと思わせれば、いったん自分も泥棒だと思こませてしまえば、我々のものだ。生きている限り、我々のものだ。」(141) と言う。ここからもわかるように、オリヴァーが地上においてフェイギン一味の仲間となっている限り、善良な心のままでいることは不可能なはずであった。ところが実際にはオリヴァーは、地上において残酷である大人達と対照的に描かれる。ここでディケンズは、オリヴァーの押し入り強盗に入る前の睡眠を次のように描くことにより、悪党とは正反対のイメージ、つまり天に召される子供のイメージを読者に印象づける。

The boy was lying, fast asleep, on a rude bed upon the floor; so pale with anxiety, and sadness, and the closeness of his prison, that he looked like death; not death as it shows in shroud and coffin, but in the guise it wears when life has just departed; when a young and gentle spirit has, but an instant, fled to Heaven, and the gross air of the world has not had time to breathe upon the changing dust it hallowed. (143)

少年は床の上の粗末な寝台でぐっすり眠っていた。心労と悲しみと息のつまるような窮屈な監禁のために顔は蒼白となり、まるで死のように見えた。それは棺の中で屍衣に包まれた死ではなく、生が去ったばかりの

時、また、若くやさしい魂が一瞬間前に天国に逃げ去り、この世の汚れた空気が、その魂によってきよめられた、変りいく塵のような肉体の上に息つく暇もない時に、あらわれるあの死の姿であった。

さらに、ディケンズは、子供が犯罪者として罪を犯すよりは、死んだほうが幸福であるということを、倫理という観点から訴える。第20章でオリヴァーは、フェイギンの置いていった犯罪者達の生涯に関する本を読む。オリヴァーは、血の凍るような恐ろしい犯罪や、人気のない路傍で行われた秘密の殺人や、深い穴や井戸の底に隠されて人目につかない死体の話を読む。死体の話でオリヴァーは、深い井戸に投げこまれた死体がそのまま沈んでいずに、何年かの後、ついに浮き上がり、それを見た下手人達が発狂して、恐怖のあまり罪を告白し、苦しみから逃れるため、早く死刑にしてくれと叫んだという箇所を読む。オリヴァーは、本を読んだ後、ひざまずいて、自分にはそのような行いを免れさせて下さるよう、また生き長らえて、そのような恐ろしい罪を犯すよりは、すぐに死ねと思召されるようにと、天に祈る。ディケンズがロンドンの靴墨工場で働いていた少年時代を回想した自伝的断片の中で「あの時に、もし神の恵みがなかったならば、私はチンピラ泥棒か浮浪少年になり果てていたことだろう」と述べていることを考慮すると、ディケンズがオリヴァーの直面する罪を犯す危機を自分自身のことのように感じていたと考えられるのである。²³

4. 結 論

父親がマーシャルシー負債者監獄に収容され、自身もウォレン靴墨工場の下層労働者や少年達に混じって、みすばらしい子供の姿で働いた少年時代の数ヵ月間の精神的外傷は、ディケンズにとって、生涯消え去らなかった。よりどころのない数ヶ月間も続く悲惨さ、秘められた恐怖、屈辱感と孤独感等が彼の奥深くまで食いこんでいただけに、見捨てられた子供達への同情が人一倍だったはずだ。少年としてのディケンズが靴墨工場の時期に悪の感染を

免れたとするならば、それは、彼の意志力と彼の語るように神の恩寵によるものであり、それらがなければ、彼自身も転落し、暴力や犯罪の世界に染まってしまう危険性があった。そういうわけで、子供達が地上において善であることが難しい社会において、ディケンズは天国という避難所を心に想定し作品に描き込んだと言える。*Oliver Twist* は、ディケンズが子供時代に持った危機感と時代において犠牲となった子供達への彼自身の深い同情が明白に現れている作品だと考えられるだろう。つまりディケンズは、オリヴァーの運命を救貧院、煙突掃除人、葬儀屋、犯罪者層と関連づけることにより、時代において犠牲となった子供達への自身の気持ちを「天に召される子供のイメージ」で統一的に表現した、と言えるだろう。

〔注〕

1. trauma（トラウマ）とは、精神医学や臨床心理学の領域では、災害や事件に遭遇した場合の、精神的・心理的後遺症を言う。この言葉の概念を心のモデルとして使い始めたのはフロイトの時代で、「忘れてはいるけれども、大きな影響を人生に及ぼしているもの」を指すようになった。広義ではプラスに作用する。ディケンズの場合、ウォレン靴墨工場の辛い思い出が人生において暗い影となってつきまとったというマイナス面と、逆にコンプレックスをばねにして作家としての成功を収めたというプラス面が考えられる。
2. 江藤秀一・松本三枝子（編）、『イギリス文化・文学への誘い』、p. 217.
3. マルコム・アンドリュース（Malcolm Andrews）は、ディケンズの子供時代の体験について、次のように説明している。

Dickens's childhood experience in the Warren's Blacking warehouse made him feel that his own childhood had come to an abrupt end and that he had been prematurely exposed to adult responsibilities and independence. This undoubtedly made him especially sensitive to the neglect and exploitation of children in Victorian England.

[*Oxford Reader's Companion to Dickens*, ed. Paul Schlicke, p. 89.]

4. ボブ・フェイギンは、消防士を父親に持つポール・グリーン (Paul Green) とともに、ディケンズの靴墨工場における仕事仲間であり、孤児であった。ディケンズは、彼らとは、自身が行儀、作法の点で異なり、“the young gentleman”と呼ばれていたと主張している。ボブは、ディケンズに対し、優しく思いやりのある人物であったようだが、ボブの存在そのものは、ディケンズにとって感謝以上に恐怖を呼び覚ます存在であった。その恐怖とは、自身もまた貧乏人の仲間入りをしてしまうのではないかという恐怖である。[Peter Ackroyd, *Dickens*, pp. 82-3.]
5. *Oxford Reader's Companion to Dickens*, p. 430.
6. 松島正一, 『イギリス・ロマン主義辞典』, pp.196-7.
7. ディケンズのアイディアは, *The Old Curiosity Shop* に最も明白に現れている。ジャーリー (Jarley) 夫人のろう人形興行のちらしを持って行ったネル (Nell) に寄宿・通学学校のモンフラザーズ (Monflathers) 先生は, 次のように言う。

‘Don’t you feel how naughty it is of you,’ resumed Miss Monflathers, ‘to be a wax-work child, when you might have the proud consciousness of assisting, to the extent of your infant powers, the manufacturers of your country; of improving your mind by the constant contemplation of the steam-engine; and of earning a comfortable and independent subsistence of from two-and-ninepence to three shillings per week? Don’t you know that the harder you are at work, the happier you are?’
(p. 235.)

モンフラザーズ先生の言葉は、ヴィクトリア朝時代において、子供を犠牲にした大人達の考え方を代表したような言葉であるが、作品の最後でこの言葉に呼応するかのような死をネルは遂げる。時代において死んでいった子供達への共感からディケンズは、次のようにネルの死を安らかなものとして描いている。

She was dead. No sleep so beautiful and calm, so free from trace of pain, so fair to look upon. She seemed a creature fresh from the hand of God, and waiting for the breath of life; not one who had lived and suffered death. (pp. 538-39.)

8. デボラ・コンドン (解説), 照山直子 (訳), 『オリバー・ツイスト』, p. 65.

9. Charles Dickens, *Oliver Twist*, p. 12.

以下、引用文は同書により、引用末尾の（ ）にページを示す。日本語訳の部分は、本多季子訳『オリヴァ・ツイスト』（岩波文庫）を参考にしたが、一部修正を施してある。

10. Daniel Pool, *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew*, pp. 240-41.

11. イギリスの最初の工場法は、1802年の法律であるとされる。1802年の工場法は、悪疫からの教区徒弟の保護を中心的な目的とする多分に救貧法的性格を残していた。一方、それ以降の工場法は経済的自由放任を前提とした上で、工場労働者の労働条件を規制するという性格を持っていた。（小宮文人、『イギリス労働法』, p. 7.）

12. 小宮, p. 8.

13. デボラ・コンドン, p. 65.

14. ディケンズは、ギャムフィールドの恐ろしさを “whose villainous countenance was a regular stamped receipt for cruelty” (20) と外面描写により伝えている。

15. William Blake, *The Poems of William Blake* ed. W. H. Stevenson, p. 68.

原文の weep, weep, weep, weep であるが、これは煤払いの掛け声で、払う sweep という語の ‘s’ が落ちてしまったものである。呼び声によくある現象であるが、‘s’ がないと、泣くという意味になり、幼い子が「泣く、泣く、泣く、泣く」と聞こえる呼び声で、早朝暗いうちに街を歩いたということになる。ブレイクの詩からその哀れさが伝わってくる。

16. Martin K. Nurmi, “Fact and Symbol in ‘The Chimney Sweeper’ of Blake’s *Songs of Innocence*”, in *Blake: A Collection of Critical Essays* ed. Northrop Frye, p. 16. 年季奉公の明けた後大きくなった子供には、一人前の職人としての生活は全く保証されておらず、まっとうな仕事も見つからない場合が多かった。

17. *Ibid.*, p. 17.

18. *Ibid.*, p. 16.

19. William Blake, *op. cit.* p. 68.

20. サイクスが語るネッド (Ned) とブレイクの “The Chimney Sweeper” の死んだ子供ネッド (Ned) が同じ名前であることに注目したい。ディケンズがブレイクの詩を読み、*Oliver Twist* にネッドという名前を使ったと考えられる。

21. William Blake, *op. cit.* p. 68.

22. *Ibid.*, p. 69.

23. リチャード・ダン (Richard J. Dunn) は、ディケンズが *Oliver Twist* を書く

にあたり1830年代中頃の貧乏人の一般的な状況だけでなく、作家本人が子供として経験した貧困も思い出していたと指摘する。[Richard J. Dunn, *Oliver Twist: Whole Heart and Soul*, p. 8.]

Works Cited

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1990.
- Andrew, Malcolm. "Childhood", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Blake, William. *The Poems of William Blake*. Ed. W. H. Stevenson. London: Longman, 1971.
- Dickens, Charles. *Oliver Twist*. New York: Oxford University Press, 1987.
- . *The Old Curiosity Shop*. New York: Oxford University Press, 1991.
- Dunn, Richard J. *Oliver Twist: Whole Heart and Soul*. New York: Twayne Publishers, 1983.
- Narmi, Martin K. *Fact and Symbol*, in "The Chimney Sweeper" of Blake's *Songs of Innocence*, in *Blake: A Collection of Critical Essays*. Ed. Northrop Frye. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, Inc., 1996.
- Pool, Daniel. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew*. New York: Simon & Shuster, 1993.
- Schlicke, Paul. "Oliver Twist", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford: Oxford University Press, 1999.
- 江藤秀一・松本三枝子, 『イギリス文化・文学への誘い』, 開拓者, 2000.
- 小宮文人, 『イギリス労働法』, 信山社, 2001.
- コンドン・デボラ, 『オリバー・ツイスト』, 照山直子 (訳), ニュートン・プレス, 1997.
- 本多季子, 『オリヴァ・ツイスト』, 岩波文庫, 1989.
- 松島正一, 『イギリス・ロマン主義事典』, 北星堂, 1995.

The Image of Child Coming Home to Heaven in *Oliver Twist*

YOSHIDA, Kazuho

Many literatures, pictures, photographs of the Victorian age show that the contemporaries were interested in childhood, and the novels of Charles Dickens also show that he was interested in it. Dickens's interest in childhood, was related to his experience in his own childhood; John Dickens, Charles's father, was a cheerful person but he had no sense of economy. He was imprisoned in the Marshalsea prison, and Charles had to work at Warren's Blacking warehouse, which gave him an agony and despair. Dickens's childhood experience in the Warren's Blacking warehouse made him feel that his own childhood had come to an abrupt end, and that he had been prematurely exposed to adult responsibilities and independence. Dickens had suffered from the trauma and expressed his view of childhood in his novels.

Dickens represented the ill-treatment of workhouse to children in *Oliver Twist*. The children suffered from the hunger. The poor relief and the New Poor Law of 1834 were the highly topical subjects when Dickens took them up in *Oliver Twist*, and his related sense of outrage at the misery of pauper children brought up in baby farms and adults living in workhouses remained strong right through to the end of his life. Oliver who says, "Please, sir, I want some more", is treated like a criminal. Oliver barely escapes being apprenticed to a chimney sweeper. Dickens showed that the children of chimney sweeper were ill-treated and connects such children to "the image of child coming home to heaven", as William Blake (1757-1827) did in "The Chimney Sweeper". Dickens expressed his feeling toward the children as victims of his age by 'the image of children coming home to heaven', relating Oliver's destiny to a workhouse, a chimney sweeper, an undertaker, and a criminal.